

No.519

皆さんの投稿でつくられる情報紙

なかま



発行 佐倉市立中央公民館
 編集 なかま編集委員会
 (佐倉市民カレッジ生と卒業生で構成)
 〒 285-0025
 佐倉市 鐺木町 198-3
 電話 (043) 485-1801
 FAX (043) 485-1803
 メールアドレス
 chuo-public@city.sakura.lg.jp

《新春に寄せて》

佐倉市長 西田 三十五

『なかま』をご愛読の皆様、新春を寿ぎ謹んでお慶びを申し上げます。市民の皆様におかれましては、新年を迎え、希望に満ちた穏やかな新春をお過ごしのことと存じます。

また、市政の運営にあたりましては、日ごろから格段のご協力をお願いしておりますことに心より感謝申し上げます。

この『なかま』は、市民カレッジの皆様を中心とした方々が作成している投稿紙として、長きにわたって継続して発行されてきたものです。これも、市民カレッジの皆様が、多大な貢献によるものと感謝しております。

さて、本年はいよいよ東京オリンピック・パラリンピックが開催される年であります。佐倉市は、アメリカ合衆国ほか三か国のホストタウンとなっております。アメリ

カ合衆国陸上チームの事前キャンプ地となることが決まっております。東京オリンピック・パラリンピックが開催されることに伴い、全国で様々な活動が行われ、今年はスポーツが大変注目される年になるものと思えます。

私は、これを機に、国際化にも対応できる人材の育成に努めるとともに、スポーツを身近に楽しめる環境の整備をすすめ、市内に住む方々が楽しく集い、なかまとともにスポーツを通して健康でいられるまちにしていきたいと考えております。

今、地方自治体は人口減少、少子高齢化による社会保障費の増大や、道路、上下水道などのインフラの老朽化等社会問題を抱え、その解決に向けた独創的な政策、自主財源の確保、最適な自治運営手法の構築が望まれております。

『なかま』は今月号からリニューアルしました

平成15年4月以来の『なかま』デザインを今月号からリニューアルいたしました。文字を大きくしましたので、投稿原稿の文字数も変わっています(4面参照)。
 また、『なかま』の発行は今月号から奇数月の隔月発行となります。

市長となった私の仕事は、市民、議会、職員が対話を通じて心をつなぐ、一つにするきずなを結び、オール佐倉で未来に向けたまちづくりに取り組むことだと思っております。市民の皆様が佐倉に住んでよかったと心から思っていただけのような、元氣と笑顔で佐倉のまちづくりを進めてまいります。

皆様方にとりまして平和で幸多い年となりますよう、心からご祈念申し上げます。年頭のご挨拶といたします。

目に余る誇大広告

良くも悪くも、近年は健康食品の絶頂期と言える。30年前頃には有り得なかつた誇大広告が氾濫していることにあきれ果ててしまう。生活習慣病が治ると勘違いするような言葉がコレデモカと言う程に多用されていることだ。

例えば、…が高めの方に、…が130以上の方に、…でお悩みの方に等々。更に説得力を付けるために使用前と使用後のグラフを付けていることです。しかし騙されてはいけません！グラフの縦軸と横軸の目盛りのサイズを良く見て下さい。わずかな差を大きく表現するために縦軸のサイズは異常に拡大されています。統計学的に正しい有意差検定をするには、被検体数が30以上、危険率が5%以下に設定されていない

とより正確な判定ができません。

それを無視した比較試験では無意味なのです。更に不都合な被検体を削除している場合もあり得ます。

最後に、最も大切なことを申し上げます。栄養機能食品は厚労省の成分規定に従って、企業が作成した商品ですが、検定許可された商品ではありません。問題が発生した場合は全て企業責任となります。輸入品は特に要注意です。

人間には絶対必要な栄養素があります。必須アミノ酸、必須脂肪酸、必須ビタミン、必須ミネラルです。健康食品で果たしてどれだけ消化吸収され、栄養効果が上がるかは薬剤師・臨床検査技師として極めて疑問です。

(王子台 畑 義治)



生物多様性といじめ問題

環境問題の重要なテーマの一つに、生物の多様性がある。多様な生物の存在は環境にとって重要であるのだが、生物を外来生物と在来生物とに分けて、外来生物は極力排除しなければならぬという考え方が当然のごとく受け入れられている。

しかし、考えてみれば在来生物も元をただせば、はるか昔、日本に渡来してきて棲みついたものが少なくない。現在でも、台風で持ち込まれた生物やあるいは貿易取引の貨物に潜在して持ち込まれた生物など、いろいろなケースが存在する。飼い主が持て余して放置された生物も含まれるだろう。それらの外来生物も、温暖化によって、日本の環境に適応していったのである。そうだとすれば、在来生物を駆逐

してしまうような深刻な弊害を

もたらす特定外来生物でない限り、日本の生態系の一つとして共存を認めることが、環境にとって重要なことだろう。

実は、ものごとを二者択一で考える思考方法は、「いじめ」を生み出す原因にもつながっているように思える。おそらく根底にゲームの思考方法があるのだろう。AかBか、○か×か、右か左か、善か悪か。コンピュータやゲーム思考によってもたらされた単純な二者択一の考え方が脳に刷り込まれると、異質とされたり、「なかま」ではないとされたり、たものを排除しようとする考えが無意識に働き、いじめ問題の素地を作り出している。

生物多様性の問題も、単に環境問題にとどまらず、こうした現代人の思考方法の問題を含んでいるように思える。

(大崎台 南木 草介)

大腸内視鏡検査

久しぶりに人間ドックに行きました。そこで初めて大腸内視鏡検査(大腸カメラ)をやりました。実施前の検査イメージは、以前の胃カメラの経験から大腸カメラも似たようなものだろうと高を括っていました。胃カメラは、光ファイバーケーブルを鼻や口から挿入して、食道や胃、十二指腸を専門医が目視観察して撮影する検査です。胃カメラの実施中は、患者は検査用ベッドに横たわって目の前のモニターで自分の胃袋の中の様子を横目に眺めるようになつており、普段は見るこゝとが出来ない光景をととても興味深く見せてくれます。

が予想とは大違いでした。あの感覚、大腸の中をかき回されるあの感覚は、まったく想像さえ出来ない未知の感覚でした。それは脳のどの記憶の引出しにもなく、私の腹腔内の小宇宙で凶暴なエイリアンが暴れている感覚とでも言いましようか、もう二度と御免こゝうむりたい感覚でした。

検査システムは、胃カメラの時と同じように目の前にモニターがあつて、大腸の複雑なトンネルの中で、怪しい病変を発見するぞと探検隊が進んで行く様子の画像が見られるものです。だけど、私の腹腔内は未曾有の大パニックのため、探検隊の活躍を平静に見ていられる状況ではありません。検査中に担当医がしてくれる画像説明などは、ほとんどどうわの空でした。検査時間は15分程度だったと思いますが、とてもとても長く感じました。

(南ユウカリが丘 若佐 秀雄)

自分の生活の術わざ

高齢者は、自由である。責任がうすい。働いていないので少数の友人以外、人との交流がない。私は読書に深入りしている。

松本清張の『砂の器』上下を読み、次いで山本周五郎の『長い坂』2冊を読んで、疲れた。

『源氏物語』は、とても読めないで、ウェイリー英訳の日本訳(左右社版、全4巻)を少しずつ読み面白さを理解している。

高齢になると、目が疲れる。大文字版(舵社)を愛読する。

その他にも夏目漱石の『坊ちゃん』、ターニャの英訳『坊ちゃん』(講談社)を楽しんでいる。とても味わい深い。

古典は『方丈記』が役に立つ。新明解古典シリーズ、桑原博史の『方丈記』がよい。高校生向けによく解説しているので理解し

やすい。

つい先日、元校長が生涯をつぎこんだという『太田道灌紀行』を購入した。仲々の研究である。臼井に臼井城址があり、道灌の弟太田図書ずしょの墓がある。地元の研究会(臼井文化懇談会)で子孫の談話があつた。

世話人の方が、太田道灌には弟がない、といっていた。私も徹底的に第二次資料を読み込んで、弟は存在しないと確信する。恐らく、戦の武将「影武者」と思う。

読書の世界は、一つの生きる世界といえよう。

(臼井台 吉井 弘)



どっちもどっち

約20年前。その日、家族との意見の食い違いがもとで、少々イライラしていた。原因は忘れた。大したことでないのは確かだ。疲れていたのかもしれない。たまたま近くにいた孫に「〇〇はもう…」と言ってしまった。

すぐに後悔した。当時孫息子は2歳か3歳だったから。ところが「どっちもどっちだよ」と、あっさり、然し自信たっぷり（そういうふう感じた）言う。驚いた。後で分かったのは、一部始終を聞いていたらしい。大岡越前守のお裁きには比べようもないが、祖母馬鹿の私は大人顔負けの態度と言葉に感動した。

あれから20年。先日、前述のことを思い出す出来事があった。食事の際、食べ物を口に放り込んで食べる夫のしぐさがいつにも増

して癪にさわって仕方がない。連日のたまった疲れが沸点に達したように、夫のやることなすことが不快に感じる。結婚当初からそういう点には無頓着。注意しても全く効果がない。たまりかねて都内に住む娘に電話をかけた。話を聞き終わるやいなや「五十歩百歩だわ」と言う。これでは味も素っ

気もない。少しは同情して欲しい。私は化粧が雑な時があり、娘は気になるそうだと。孫の言うことには苦笑したが、悪い気はしなかった。一方、娘の本音の言葉に不満が倍加した。ひととき、違いの理由を考えた。「孫は幼い故に純真。娘は大人だから私見が入る」。先述の答えだ。要するに子供か大人かの違いか。それはさておき、高齢になる程一日一日が貴重だ。夫婦仲良く暮らしましょう。

（白銀 都築 洋子）

編集委員エッセイ

引き継がれしもの

畔田から羽鳥に抜ける道沿いの垣根から頭を覗かせてそれはあった。竹棒の上部に藁苞があり、そのまん中を紙で巻き上部には串が挿してある。この道を通る回数が多くなるにつれ、同じ物が電柱の脇、田んぼの岐路、道路の際などにも立っていることに気づいた。羽鳥在住の方と付き合いのある知人に聞いても「あったところ梵天だとわかった。」

そもそも梵天とはなにか。江戸時代から出羽三山（羽黒山・月山・湯殿山）信仰があり、男は一生に一度はお参りするものとされ奥州参りといわれていた。梵天は奥州参りに行った後で立てるものである。また一緒に行けた仲間がみんなで三山碑を建て信仰と親睦を兼ねた講をもつ。

羽鳥の甲賀神社の裏手には沢山の三山碑を見ることが出来る。

7月の終わり頃に、田んぼの岐路の梵天が新しくなり真っ白な幣束や榊がつけてあった。無事にお参りを済ませてこられたのだろう。風習は一度途切れると終わってしまうことが多いが、江戸時代から今まで続いていることは驚きである。令和の時代にも引き継がれていって欲しいと願うばかりだ。

（池田 孝子）

『なかま』の投稿記事募集中

日常で気付いたことなどを「随意にお書きいただきお送りください」（送付先は1ペーシ右上参照）。字数は590字（14字×42行）程度です。掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただきます（ご指摘が歓迎です）。